



## 『敗戦、されど生きよ』石原莞爾最後のメッセージ 早瀬利之著

終戦後、広島、長崎をはじめ全国を駆け回り、悲しみの中にある人を励まし続け、敗戦国日本の再建築を提言した石原莞爾の晩年の姿を、日記と多くの資料、証言をもとに描いたドキュメント。

早瀬利之

(はやせ としゆき)

1940年(昭和15年)長崎県生まれ。昭和38年鹿児島大学卒業。石原莞爾研究者。著書に「石原莞爾 満州合衆国」、「石原莞爾 満州備忘ノート」、「石原莞爾 国家改造計画」、「参謀本部作戦部長石原莞爾」、「石原莞爾北支の戦い」、「南京戦の真実」、「サムライたちの真珠湾」、「将軍の真実。松井石根将軍の生涯」(以上、光人社および潮書房光人社)、「奇襲」(南日本新聞開発センター)、『石原莞爾 マッカーサーが一番恐れた日本人』(双葉新書)、「靖国の杜の反省会」「石原莞爾満州ふたたび」(以上、芙蓉書房出版)などがある。日本ペンクラブ会員、満州研究会会員。

東久邇宮内閣組閣への関与、「戦争放棄、都市解体、簡素生活、皇居と首都移転」など戦後日本再生の提言、勝脱ガンに侵されながら極東軍事裁判酒田法廷での堂々たる主張…

終戦直前から昭和24年に亡くなるまでの4年間の石原の壮絶な戦いをダイナミックに描く。

死の床で書いた「新日本の進路」の全文を掲載。

「トルーマンこそ、最大の戦争犯罪人だ！」

「敗戦後、歯に衣着せず、堂々と日本の立場を発言したのは、石原莞爾ただ一人だった」(本書「プロローグ」より)